

琉球大学学術リポジトリ

リスニングと発音指導について

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-12-23 キーワード (Ja): リスニング, オーラル・コミュニケーション, 発音・音声指導, ディクテーション, CALL, シャドウイング, プロソディ, mundliche Kommunikation, Hör- und Ausspracheübungen キーワード (En): Diktat, CALL, Shadowing, Prosodie 作成者: 吉井, 巧一 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/2740 |

リスニングと発音指導について

吉井 巧一

”Eine gute Aussprache verbessert die Kommunikationsfähigkeit und stärkt das soziale Ansehen.” (Langenscheidt Verlag)

「良い発音は、コミュニケーション能力を高め、人望を厚くする。」

(ランゲンシャイト出版社)

キーワード：リスニング、オーラル・コミュニケーション、発音・音声指導、
ディクテーション、CALL、シャドウイング、プロソディ

1. はじめに

現代外国語教育の学習目標が、文法・訳読を中心とするものから、いわゆる「コミュニケーション能力」の養成に置かれるようになって久しい。しかしながら、(たとえかなりの期間集中的に努力した場合でも)外国語が思うように聞き取れないという悩みを持つ学習者は、相変わらず少なくないようである。日本人英語学習者を対象にした種々の発音に関するアンケート調査の結果によると、8割以上が外国語教育の発音指導に不満を持っており、新出単語の読みや教科書の音読だけで、コミュニケーション活動の一環として行われる発音指導を受けていないと言う結果が出ている。そもそも我が国の外国語教育では、受験という大きな障壁もあり、聞き取りや発音訓練を体系的に授業カリキュラムに組み込んだ教材の開発が遅れていることは否めない事実であろう。教員自身の発音能力がほとんど問われない上に、発音の善し悪しが評価基準に含まれない現状では、当然の結果であるとも言えようか。しかし、「ネイティブスピーカーによる本物の英語」を看板にする語学学校や、「テープを聞き流すだけで知らぬまに飛躍的にアップするリスニング力」をうたう学習教材が巷に氾濫していることは、真摯に目的を持って外国語を学ぶ者にとって、いかにリスニン

グが重要かつ不可欠な外国語運用能力であり、一般の学習法に欠如した領域であるかを如実に示している。そこで、ただテープを聞き流すだけである日突然相手のということが理解できるような魔法の術はひとまず措くとして、本稿では、筆者がここ数年来琉球大学のゲルマニステイク専攻学生を主対象にした、「ドイツ語LL演習」¹⁾の授業で試みたいいくつかの指導例を紹介しながら、学習者の外国語聴解力を伸ばす可能性について若干の考察をすすめてみることにする。

2. リスニング指導の重要性

コミュニケーションあるいは会話能力という場合、話すこと、すなわち表現力が最も重要であるかのように思われがちであるが、少なくとも外国語学習の初期段階にあつては、まず相手の発話内容を的確かつ迅速に理解することが、円滑なコミュニケーションの前提条件として必要不可欠であろう。比較的自由に自分のペースや関心に合わせられる発話と異なり、聞き取りに際しては、当然ながら相手が一方的に主導権を握っている。たとえば「早口」、「不明瞭さ」、「基礎知識の多寡」、「方言」、「言い誤り」、「雑音」、その他様々な悪条件のもとで相手の発話意図を理解し、的確な応答によってスムーズなコミュニケーションをよどみなく進めていくためには、一見受動的と思える聴解力が、極めて大きな役割を果たしていることに異論の余地はなからう。「受動的」ないしは内容理解中心の語学教育から、発信型の「能動的」な語学教育への転換がさげばれているが、相手を見捨て、自分の言いたいことを一方的に述べただけでは、だれからも相手にされないことは明白である。まさにリスニング（聴解力）こそが、ボールを投げあうような円滑な対話にとって、表現力以上に決定的に重要な要素であると言えようか。

上述したように、受験教育の弊害の一つである外国語教育における音声面の練習不足が、聞き取りを苦手とする多数の学生を製造してきた最も大きな原因ではあろうが、たとえば、単に英語教育現場により多くのいわゆる“TA (Teaching Assistant)”としての Native speaker や音声教材を投入すれば、この問題がすぐさま解決されるとは考えられにくい。なぜなら、日本語とはまったく異なる言語体系を持つ外国語を、理論的体系的な学習メソッドな

しに、単なる音声言語情報として大量にインプットしたところで、現在の劣悪な外国語教育環境のもとでは大きな効果を期待できるとは思えないからである。"intuitive-imitative approach"で発音をマスターするためには、十分な言語材料と並び、十分な模倣・反復練習のための時間が必要である。"analytic-linguistic approach"、すなわち音声学の知識や日独対照言語学の知見も活用しながら、分析的に発音を習得する方法が取り入れられるべきであろう。

一般的にはある年令（「臨界期」と言われる7～10歳前後）を過ぎての外国語学習では、いわゆる耳の訓練すなわち発音に大きな限界があるということが、第2外国語習得理論の諸研究からも言われている。たとえば、その年齢を過ぎてから、あるいは成人してから英語やドイツ語を学び始めた日本人学習者は、「LとRの違い」を聞き取れる、あるいは区別して発音できる人が極めて少ないという事実がある。しかしまったく不可能というわけではなく、適切な訓練をすれば、かなりの改善がみられるという実験報告もあるように、日本人学習者に的を絞った、専用の音声指導教材の開発が必要であろう²⁾。また、後述するように、個々の単語レベルでの発音能力よりコミュニケーション上はるかに重要な要素である、一つのまとまりのある言語表現全体を捉えた、それぞれの言語特有の「リズム・流れ・イントネーション等」³⁾を体系的に学習する機会も、我が国の外国語教育ではなおざりにされることが多いが、まさにそれこそが最も重要かつ外国語教育に必要不可欠な言語訓練ではなかろうか。個々の文節音素に過度の重点を置かず、正確さを多少犠牲にしてでも、流暢さ、リズム感を重要視することを発音指導の学習到達目標として設定すれば、リスニング能力のアップにも大きく貢献するものと思われる。

3. 情報の選択

母語での言語活動を思い出すまでもなく、我々は相手の発話内容をすべて百パーセント理解した上で会話を成立させているわけではない。普通は、丁度新聞を拾い読みするように、相手の発話における自分にとって必要不可欠な情報だけをピックアップしながら、聞き流して行くのが一般的な方法であろう。したがって何が重要で、何が重要でないか、それを聞き分ける訓練を行う必要が

ある。たとえば、「否定詞」、「理由を表わす前置詞・接続詞」、「語順」、「抑揚」、「間のとり方」、「表情」、「ジェスチャー」等⁹⁾、いわば重要な情報の前触れになる「目印」についての体系的学習も必要であろう。「だいたいわかればよい」、「重要な部分だけを聞き取ればよい」といっても、細かな部分が聞き取れてはじめてそれらのことが可能になるわけであるから、単に無秩序な練習を繰り返すだけでは無駄である。ニュースを聞く時などのように、おおまかな内容を聞き取ることが目的なのか（グローバルリスニング）、天気予報や列車の案内などのように、自分に必要な情報だけ分かれば良いのか（セレクトイブリスニング）、電話番号などのように細かくすべてを聞き取らねばならないのか（マイクロリスニング）、学習目標を明確にしておかねばならない。

筆者がリスニング訓練用教材の一部として利用しているテープ教材「Hören Sie mal!」⁹⁾では、実際の発話状況に極めて近い、すなわちナチュラルスピードでの発話による、言い誤りや周囲の雑音等もすべて含まれた比較的長めの会話を聞いて、その中の部分的かつ必要な情報だけを意図的に聞き分ける訓練を行う。この意図的に聞くという作業が重要である。母語では自動的かつ即座に実行される、重要/非重要な情報選択作業も、外国語学習にあっては訓練無しでは習得され得ない。またそのような訓練の結果、学習者はすべてを理解しなければならないという、実に馬鹿げた、しかし実際には意外と多くの外国語学習者が教室では囚われがちな「完璧主義」という誤りから解放されていく。このことは学習の緊張感を和らげ、気楽で楽しい学習環境を作り出すという大きなメリットをもたらすことがある。

また最近新たにビデオ編集作業用に開発されたコンピュータ技術を用いれば、不自然さを全く感じさせずに、会話のスピードだけを落とすことも可能になる。くり返し述べてきたように、聞き取り訓練において最も重要な要素である、その言語本来の「リズムやアクセント」を無視した、ただゆっくりしたスピードで吹き込まれただけの極めて不自然な、いわゆる「初心者用テープ」ではないそのような教材が利用できれば、ナチュラルスピードによる会話聞き取りの準備練習としてそのメリットははかり知れない。

4. ネイティブ・スピーカー

聞き取りあるいは発音指導というと、まずネイティブ・スピーカーの活用が考えられようが、彼等を単なる日本人教員の補助者としてではなく、全体的な授業計画の中にきちんと位置づけ、学習者の語学力育成に役立てている例は、残念ながらそれほど多くはないようである。筆者の授業経験からすれば、むしろ発音およびリスニング指導には、前述したように、たとえば日本人の犯しやすい発音上の誤りを熟知している日本人教員が、カセットテープ等を利用して指導するほうがより効果的である場合が少なくないと思える。効果的な発音指導には、学習者の発音上の特徴や困難点を理解した教員が不可欠である。モデルや規範としての母語話者の正確な発音はもちろん必要であるが、それは発音指導の到達目標としてではない。

ここで改めて強調するまでもなからうが、「聞き取る」(リスニング)と言うことと、「聞こえる」(ヒアリング)と言うことはまったく別である。いくら「本物の発音」を浴びるようにインプットされたところで、それらを弁別できる能力が備わっていなければ、すなわち受け皿が準備されていなければ、すべては時間の浪費である。聴解力をきたえるためには、「耳」そのものではなく、聞こえた音を言語として認識する「理解力」を育てなければならない。そのような「理解力」アップを目標にした具体的な教授法を、以下に筆者の実践例を元にいくつか挙げてみる。

5. 聞き取りと音読

自分が発音できない(読めない・理解できない)音は聞き取れない。個々の音素の発音に関しては、ドイツ語は日本人にとって(英語と比較すれば)それほど発音困難な言語ではない。しかし重要なことは、個々の単語レベルでしっかり読めるかどうかではなく(残念ながら日本の外国語教育では、発音練習というと相変わらず脈絡も何も無い羅列された単語を、模範例に合わせて全員で合唱することだと誤解されているようである)、コミュニケーション活動としての発話、すなわち表現全体を捉えてドイツ語として読めるかどうかである。聞き取りに際して最も大切な要素である、リズム・アクセント・間・プロソデ

イ⁶等は、聞くよりも自分で実際に読んでみるほうがはるかに理解しやすい。新出単語のクラス全員による斉唱や、和文への翻訳の通過儀礼としての無意味なテキスト音読だけでは、日本語ドイツ語間のリズムの差異は決して習得され得ないであろう。卑近な例をあげるなら、たとえば歌を練習するとして、何度も繰り返しレコードやテープを聞くだけではなく、実際に自分でカラオケのように歌ってみて、それを本物と比較するほうがはるかに上達のスピードが早い。

先にも触れたように、到達目標としては、当然ながら、“Audiolingual Method”全盛時代のようなIPA (International Phonetic Alphabet) を用いての音素レベルでの訓練による、ネイティブスピーカーなみの完璧な発音が要求されているのではなく、1980年代以降外国語教育法の主流となった“communicative approach”で目標とされるような、十分明瞭でかつ相手に過度の負担をかけない程度の発音能力で十分であろう。すなわち、アクセント、イントネーション、リズム等の超文節音素レベルでの発音練習を中心にすべきであることは、先に強調したとおりである。

その際、最も効果的な学習法はシャドウイング⁷⁾であろう。方法は極めて簡単である。すなわち、少し音量を落としたテープに合わせて同時進行的に音読するだけである。もちろん授業として行う場合には、ヘッドフォンカセット装置を備えたLL教室が不可欠であるが、宿題として、家庭学習の形態で行うことも十分可能である。その場合、クラスの学習者数が極端に多くなければ、学習者の音読したカセットテープを宿題として提出させ、オフィスアワー等を利用して教員が個別にコメントすれば、学習の動機づけにもなり効果が大きい。なぜなら、聞き取り能力と同様、個々人の音読能力差は、たとえ初学者であっても極めて大きいからである。音楽と同様語学においても、音感・リズム感の分野における個人差が大きいから、現行のような多人数クラスでの指導には限界があろうが、ここに紹介したような方法を用いれば、個別指導も十分可能になる。

また、多人数クラスでの簡単なしかし以外と効果的な授業テクニックとして、音読練習では、パートナー練習が気楽に行えるという点でよいが、授業時間の最後に、その日の重要表現のいくつかを適切な発音で暗唱できたペアから帰

宅させるというゲーム形式をとると（一部の学生には少し残酷な面もあろうが）、授業時間の最後まで緊張感を持続することが可能である。自分が確実に発音できる（単語ではなく一つのまとまりのある）表現なら、それを聞き取ることも容易である。

6. デイクテーション

筆者が聞き取り訓練の一環として授業中頻繁に行う「書き取り」の効用については、改めてここで多くを述べる必要もなかろうと思われるが、聞き取り訓練という観点から、次の点を強調しておきたい。何を・いつ・どの程度・どのように書き取らせるか、クラスや学習者個人個人に合わせた十分な教育的配慮が必要である。何を課題として選定するかは、まず既習の文章を、続いてそれを少しアレンジしたものを、最後に未習の表現も含まれたテキストを材料に選ぶべきであろう。大事なことは、決して難解すぎるテキストを選定しないことである。リスニング訓練はかなり負担の大きいタスクであり、あまりにレベルが高すぎて殆ど理解できないような教材や、負担軽減のための予備練習に多くの時間をとられるようでは、学習者の学習意欲を殺ぐことになる。達成感が得られるような比較的簡単な題材を用いて、なるべく頻繁に、できれば授業毎に、また試験を行う際には必ず、分量の多寡は別にして書き取りを行うべきであろう。

ところで、聴解力と記憶力には非常に密接な関係がある。書かれた文字を後に再確認できる読む作業と異なって、一瞬で消えてしまう音声がある程度まとまった分量消化していくためには、コンピュータのように処理スピードと並んでメモリー（記憶容量）の大きさが問題となる。聴解力の個人差が大きい一因である。できれば、学習者個人個人に合わせた練習メニューが欲しいところである。

また、聞き取ったテキストを、少し時間をかけて文法的にチェックする習慣をつけることも重要であろう。語尾や機能語等のアクセントを持たない、したがって極めて曖昧にしか発音されない音を書き留めるのは、文法力があって始めて可能になるからである。そのためにも、ただ単に聞き取りだけに終わるの

ではなく、たとえば宿題として、聞き取った文章の書き換えや追加を加えるなどの工夫ができよう。一回目の読み上げで全体を把握し、二回目に書き取り、その後文法チェックのための時間をおいてから最後にもう一度確認のための読み上げを行うという方法が一般的であろうか。

また一種のスピーチコンテストの様な効果も狙いながら、その課の重要表現が含まれた、内容的にまとまりのある段落あるいは要旨などを暗唱課題として習熟させ、最後にスベルチェックも兼ねて書き取りを行えば記憶定着率も良い。このように、中心はリスニング・発音訓練ではあるが、ただ単に聞き取りを鍛えることだけに着目するのではなく、文法・構文・意味・作文すなわち外国語の4技能「読み」「書き」「聞き」「話す」と言うすべての分野を視野に入れた学習をセットにして考慮すべきであろう。そうすれば、音声面を練習の中心として扱いながら、実は総合的な語学学習を行っていることになる。発音訓練だけを主眼にした科目を新設したり、発音集中講座を実施したりする余裕がなくとも、発音指導は工夫次第で十分可能である。

筆者が実際授業で使用した市販の書き取り訓練用ソフト"Diktat Deutsch als Fremdsprache"⁶⁾というCD-ROMソフトでは、比較的簡単なテキストから始まって、次第に難しくかつ長いテキストを聞き取る訓練がプログラムされている。準備段階として、各単語毎の聞き取り(必要なら簡単なドイツ語による説明がある)、及びそのテキスト中に含まれる重要表現の穴埋めテストが用意されている。さらにコンピュータによる自動採点機能がつき、各個人のデータ保存、誤答頻度・誤答分野の統計処理も行うことができるため、学習者それぞれに対するきめ細かな指導助言が可能となっている。すなわち、前述したように学習者個々人の能力差がとりわけ大きい聞き取り・書き取り練習のような領域では、教師一人の対応では限界があるため、機械を活用する教授法が持つメリットは極めて大きい。また、これらのCDソフトは発音を特徴づける要素を視覚的、数量的(周波数分析)に提示できるというメリットも持っている。もしCALLラボ等を活用できる学習環境があれば、個別の聞き取り訓練という理想的な外国語学習形態での聴解力訓練に利用できるであろう。

7. おわりに

以上述べてきたように、外国語教育における聴解力や発音訓練という分野でも、我々教師が工夫できる余地はまだまだ大きい。さまざまな外国語学習者の意識を調査したアンケート結果⁹⁾等を見るまでもなく、現在では大部分の外国語学習者の学習動機・学習目標は、音声によるコミュニケーション能力の獲得に置かれている。それはドイツ語を知識獲得のための道具として、あるいはいわゆる大学人の「教養」として学んできた、過去の世代の外国語学習とは全く異なった、外国語を実際のコミュニケーション・ツールとして学ぶ新しい語学学習の始まりでもある。口頭コミュニケーションでは意味が伝わりさえすれば、発音など少々まずくてもよいと錯覚されがちであるが、冒頭に引用したように、発音には社会的信用や人格に影響を及ぼす可能性まで有る以上、明瞭で相手に不快感を与えない程度の発音能力を育成することは極めて重要である。我々語学教師も、好むと好まざるとにかかわらず、そのような新しい流れに逆らって、教壇に立ち続けることはできないであろう。「未知の世界への扉」、「異文化世界への架け橋」となる新しい外国語を学ぶ楽しさを、すべての外国語学習者に提供する一助になればと、筆者のささやかな実践報告を試みた次第である。

着実に外国語を聞き取るコミュニケーションに不可欠の能力が付き、しかも自分のペースで楽しく学習できる方法があれば、より多くの履修希望者を第2外国語学習の場に呼び戻すことも不可能ではなかろう。そのためには、カリキュラムの改正や施設の整備、あるいは教員の意識改革・再教育、リスニング評価の問題等解決すべきたくさん問題があろうが、第2外国語教育の現状を認識し、自信を持って努力を続けなければならないであろう。

注

- 1) 現在ではドイツ文化専攻学生2年生の必修科目として提供されているが、以前は自由科目として、ドイツ語好きの様々な専攻の学生が数名単位で受講することがほとんどであった。
- 2) 「LとR」以外に例えば「BとW」、「FとHとV」、「EとAとI」、「MとN」等の差異は、ドイツ語独特の変母音や特殊な子音の発音より、日本人初学者

にとっては分かりにくいであろう。20しかない音素で発音体系が成り立っている日本語の話者が、40以上と言われる音素を使い分けるドイツ語を発音する際には、当然その音と比較的近い日本語の音があれば、その音で代用してしまうからである。また、いわゆる音節を単位としたリズムの言語である日本語に対してきわめてハッキリとした強弱アクセントのリズムを持つドイツ語の特徴を、例えば簡単な詩の朗読や日独両方の音楽テープを比較しながら聞かせたりして、早い時期に印象づけておくことも効果的である。

- 3) 単語レベルではなく、ひとつのまとまりのあるドイツ語表現全体を捉えてドイツ語として聞く、あるいは発音できることがリスニング訓練の要であり、すべてであるといっても過言ではない。日本人の話すドイツ語が相手に理解されない最大の原因は、個々の音素の発音のまずさに有るのではなく、超文節音素であるイントネーションやリズムが、ドイツ語のそれと較べて大きく逸脱しているからである。たとえば、日本語のリズムでは一つ一つの音節は大体同じ長さで発音されるが、ドイツ語のような強いアクセントを持つ言語では、弱いアクセントの音節が短く発音される。その結果、ドイツ語独特のめりはりのきいたリズムができあがる。ところが「抑揚」、「リズム」、「間」、「アクセント」、「流れ」等すべては感覚的な要素の非常に強いものであるため、習得に要する時間の個人差は非常に大きい。
- 4) 「リスニング」という言葉から、一般的には音声カセット、すなわち音だけに集中して訓練することがリスニング指導の常識であるかのような先入観があるが、ジェスチャー等の非言語表現についても、ビデオを活用することによって指摘しておくことができる。たとえば、話者の喜怒哀楽や対話相手の違いによる（男か女か、若者か年寄りかなど）発音のスピードやリズムとの関係。重要な情報が発信される直前には、しばしばアイコンタクトがとられるなど。また、ビデオの音声を消して、話者の口元や顔の筋肉の緊張状況などを視覚的に提示することによって、胸式呼吸で話される日本語と腹式呼吸が中心のドイツ語とのダイナミズムの違いを意識させたり、日本人の話すドイツ語のボリュームが低すぎるということが、無意識のうち

に自信のなさや弱々しいイメージと結びついてしまうことなどを指摘できる。

- 5) Hümmler-Hille, Claudia; von Jan, Eduard: "Hören Sie mal! Übungen zum Hörverständnis" (Hueber Verlag, mit 3 Hörkassetten, 1988.)
- 6) プロソディー (prosody) とは、リズム、ストレス、イントネーション、ポーズなどを含んだ韻律特性のことであるが、注3) でも指摘したように、音節でリズムをとる日本語と、アクセント (強弱) でリズムをとるドイツ語では全く異なっている。その差異を感覚的に把握できない学習者に、いかにしてドイツ語のプロソディーを体得させるかが、リスニング指導の第一の課題である。
- 7) 山内進「Shadowing」参照。
- 8) "Diktat Deutsch als Fremdsprache, Grund-und Mittelstufe" (Heureka-Klett Softwareverlag, Stuttgart 1996.
その他、リスニングや発音訓練に利用可能なCD-ROM教材としては、
"Triple Play Plus, German" [Syracuse Language Systems],
"Aussprache Training Deutsch als Fremdsprache" [Hueber, München]
等多数有る。詳細については、拙稿「新しいドイツ語教育と"CALL"について」(『BAKEN 仲井間憲児選暦記念論集』琉球大学法文学部ドイツ語研究室、1999年)を参照されたし。
- 9) 森田孟進 他:「初修外国語の履修実態に関する調査研究」(文部省教育方法等改善経費プロジェクト、琉球大学大学教育センター、1998年3月。
「初修外国語の教育方法改善のための調査研究」(琉球大学教養部、1994年3月)参照。

主要参考文献

- 宇留野宗嗣：「英語が聞き取れない生徒のために」（『現代英語教育』第30巻第6号、研究社、1993年）
- 川越いつえ：「英語の音声を科学する」（大修館、1999年）
- 川島浩勝他：「英語の発音指導」（『英語教育』増刊号、大修館書店、1999年）
- 佐伯 智義：「科学的な外国語学習法」（講談社、1992年）
- 高橋 潔：「リスニング」（研究社出版、1993年）
- 竹蓋 幸生：「ヒアリングの行動科学、実践的指導と評価への道標」
（研究社出版、1993年）
「ヒアリングの指導システム、効果的な指導と評価の方法」
（研究社出版、1992年）
- 山内 進：「Shadowing」（『琉大LL通信』第1号、琉大FLSラボ委員会、1994年）
- Dahlhaus, Barbara:「Fertigkeit Hören」Fernstudienprojekt zur Fort-und Weiterbildung im Bereich Germanistik und Deutsch als Fremdsprache, Langenscheidt, 1994.

Zusammenfassung

Einige Vorschläge zu einem neuen Hörverständnisstraining

Koichi Yoshii

Schlüsselbegriffe: mündliche Kommunikation, Hör- und Ausspracheübungen, Diktat, CALL, Shadowing, Prosodie

An dieser Stelle möchte ich einige konkrete Vorschläge aus meiner Klasse "Deutsches Seminar im Sprachlabor" machen, wie man Deutsch insbesondere bezüglich der Hör- und Sprechfertigkeiten effektiver lernen kann. Dieses Seminar findet schon seit Jahren an der Ryukyu Universität statt. Wichtig ist, daß man nicht einzelne Wörter, sondern einen sinntragenden Satz als solchen verstehen und auch aussprechen lernen kann. Wie schön ist es doch, wenn unsere Deutschlernenden die deutsche Sprache wie eine schöne Musik genießen können. Dazu müssen wir immer darauf achten, daß die Unterschiede zwischen Deutsch und Japanisch tonsprachlich (prosodisch) groß und die meisten der japanischen Lernenden sich dieser Tatsache nicht immer bewußt sind.